

国立国語研究所学術情報リポジトリ

辞書検索能力を養成する初級漢字カリキュラムの理念と実践

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者:</p> <p>公開日: 2019-03-05</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En): beginning-level kanji syllabus, dictionary use, structure and usage of kanji, autonomous learning, authentic materials</p> <p>作成者: 柳町, 智治, 副田, 恵理子, 平塚, 真理, 和田, 衣世, YANAGIMACHI, Tomoharu, SOEDA, Eriko, HIRATSUKA, Mari, WADA, Kinuyo</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	https://doi.org/10.15084/00001871

報告

辞書検索能力を養成する初級漢字カリキュラムの理念と実践

Principles and practice of a beginning-level kanji syllabus promoting dictionary use

柳町 智治・副田 恵理子・平塚 真理・和田 衣世

YANAGIMACHI, Tomoharu・SOEDA, Eriko・HIRATSUKA, Mari・WADA, Kinuyo

要旨

本稿では、非漢字圏からの初級学習者を対象とした漢字辞書検索能力の養成を目指す漢字カリキュラムをもとに、漢字の構造と用法に関する体系的な理解と言語運用能力の養成を重視する授業の理念と実践例を紹介する。本漢字カリキュラムは、1) 初級初期段階で扱い可能な漢字語彙と教材の範囲の拡大、2) タスク中心の機能的で実践的な漢字学習への転換、3) 会話や文法など他の技能や知識との有機的な連携、4) 自立的学習者の養成など、様々な肯定的変化を現場の教授者と学習者にもたらす可能性がある。

キーワード：初級漢字カリキュラム 辞書検索 漢字の構造と用法 自立学習 生教材

1. はじめに

日本語教育における漢字の学習は、なるべく短期間の日本語学習を経て実践的なコミュニケーション能力を獲得したい初級日本語学習者、特に多くの非漢字圏出身の学習者にとって、多大の時間と労力の投資を要請するものである。また、漢字圏、非漢字圏を問わず、日本語学習の動機や目標は多岐にわたるようになってきている。これらの問題に応じる形で様々な漢字の教授法がこれまでに開発されてきたが、本稿では特に、非漢字圏出身の初級学習者に対する漢字指導上の課題をとりあげ、初級初期段階から漢字辞書の情報検索活動を通して漢字の構造と用法を体系的に理解・習得させる実践的な漢字カリキュラムを提唱し、その具体的指導例を紹介する。このカリキュラムは、学習者が日頃から目にする機会の多い生教材の読解作業を中心に据え、辞書使用と言語タスクの達成を重視した授業形態を通して体系的で機能的な漢字指導法の展開を目指すものである。

2. 初級漢字教育の課題

初級の漢字教育では、「漢字リスト」の形式で目標漢字と関連語彙が提示され、それに基づいて読みや書きを学習し語彙を増やしていく方法がとられることがある。ただ、これは脱文脈化された暗記ものとしての学習になりがちである。また、加納(1994)も指摘するように、個々の漢字について獲得された知識の強化と拡大が強調される一方で、初級の漢字学習では、漢字の構造と用法に関する体系的な説明や知識の整理はまだ十分とは言えない。これらの点は現在でも漢字教材開発上の重要な課題の一つと言えるだろう。

さらに、学習者の漢字の「能力」の評価についても、学習者が試験範囲の漢字を記憶しているかを問う「アチーブメント・テスト」を通じて行われ、学習の成果は「いくつ覚えているか」「いくつ書けるか」という認識、再生可能な漢字や関連語彙の数によって測定することが行われている。会話技能の評価における「OPI」の採用やロール・プレイにもとづく授業（牧野他，2001；山内，2000，2005）に代表されるように、他の技能の教授場面においては、学習者が学習した項目を使用して「実際にどのような言語機能やタスクを果たすことができるようになったか」を評価する考えが浸透してきているが、初級レベルの漢字の学習においても、機械的な記憶からタスク中心の実践的な学習への転換が図られるべきだろう。

3. 辞書検索活動中心のカリキュラムが生み出す変化

以下では、本稿で提唱する、辞書検索活動を取り入れた初級漢字カリキュラムへの転換が、実際の漢字指導・学習の内容や形態にどのような変化を生み出すかについて、(1) 扱える漢字語彙の拡大、(2) 辞書検索を通した漢字の構造・用法の体系的学習、(3) 他の技能との連携、(4) 自立的な学習者の養成、という四つの側面から考えていく。

3. 1 扱える漢字語彙の拡大

漢字辞書を検索する技能の養成を学習の軸に据えることの意義として、まず、学習やタスクの対象にできる漢字や関連語彙が飛躍的に増加する点が挙げられる。初級学習者であっても、学習目標漢字だけを対象にした練習に限定されることなく、幅広い漢字語彙を含む教材を用いた学習が可能になる。辞書検索を通した課題達成を主眼とした機能的なカリキュラムに転換することで、学習の題材の質的、量的な拡大が可能となり、中上級のレベルで扱われるような生教材も初級初期の段階から使用できるようになる。この技能を早期に獲得することは、日本で実生活をしている初級初期の学習者のニーズにも合うものである。

さらに、教室での作業の変化に伴って、学習の評価の方法も、アチーブメントタイプのテストだけでなく、プロフィエンス型テストの要素を取り入れながら、より実践的な言語タスクの達成能力としての漢字力を測る可能性が生まれてくる。このような評価方法の実例については、後述の小テスト・試験例の箇所で紹介する。

3. 2 辞書検索を通した漢字の構造・用法の体系的学習

辞書検索活動は、学習者が漢字の画数、部首、読みに関する仮説を立て検証、修正を繰り返す過程であり、加納（1997）がその重要性を指摘する漢字の基本的しくみや構造、用法に関する情報を、辞書検索という具体的な活動を通して体系的に学習者に意識させることになる。それが、その後の漢字学習をより体系的なものとし、効果的な学習を促すものと考えられる。実際、辞書検索の漢字学習への効果を実証的に検証した平塚・副田（2005）

では、読解過程の中で辞書を使って未知の漢字語の検索活動を行うことが、その漢字語の記憶を促進し、特に字形の記憶への効果が顕著であったことが報告されている。

漢字の指導・学習時間を初期の段階から辞書検索能力の養成に割くことで、通常のカリキュラムに比べ、授業で導入される漢字数が減るかもしれないが、漢字学習を促す体系的な知識の習得は、「3. 1」で述べた扱える漢字語彙の拡大とともに、新出漢字の減少分を補うものであると考えられる。

3. 3 他の技能との連携

また、辞書検索を取り入れた初級漢字カリキュラムの理念と実践は、漢字だけを独立して扱うのではなく、他の技能との有機的な連携も視野に入れたものとなる。以下の実践例にあるように、本カリキュラムでは電話で人名や地名の漢字の情報を交換する場面を取り上げている。こうした場面では、辞書検索活動を通して身に付けた個々の漢字や漢字語彙に関する知識が必要であるだけでなく、更に、十全な伝達と理解のために会話や日本語全般に関する知識や技能と絡めて運用できる能力が不可欠である。漢字の学習が日本語学習の他の領域や技能と、あるいは、母語話者や他の非母語話者とのコミュニケーションとどのような接点をもっているのか、その点を考慮したカリキュラムデザインと言えるだろう。

3. 4 自立的な学習者の養成

辞書検索活動を初級漢字カリキュラムにおいて取り入れることのもう一つの意義は、辞書検索技能の獲得が漢字の指導において重要な目的の一つである自立的な学習者の養成（川口，1995）につながる点である。辞書を、初級の、しかも早い段階から授業に取り入れることの重要性は、既にカイザー（1998）も指摘しているが、実際に漢字辞書を初級漢字のカリキュラムに内包することにより、学習者は長期にわたる暗記学習の成果を待たずに、自己の学習リソースの一部として辞書中の情報を取り込むことが可能になる。それは同時に、自立学習で扱える教材等の範囲拡大も意味する。筆者らが所属する大学では、日本語学習者の多くは学習がある程度進んだ中級の段階で電子辞書を購入しているが、本稿の実践例では、ゼロ初級者全員に電子辞書を購入させており、学習者は教室外で未習の漢字語彙に遭遇した時にも、携帯している電子辞書を用いてその場で検索して確認する習慣を身につけている。早期の辞書導入は「学習者の自発的な読解活動」（加納，1999）を奨励し、積極的に自己の学習デザインに関わり実行していく学習者を養成する点においても望ましい方策と言える。

4. 実践報告

この項では、これまで議論されてきた辞書検索活動を中心に据えた初級漢字カリキュラムの実践例として、北海道大学留学生センターの日本語予備教育「日本語研修コース」の

一環として行われている漢字クラスを紹介していく¹。

4. 1 漢字授業の概要

同コースは、1 コマ 90 分の授業を週 15 コマ、計 15 週間にわたって行い初級課程を終える集中コースである。そのうち漢字の授業は週 2 コマであり、定期試験を除くと全体で 26 コマ程度の授業数になる。学習者はほぼ全員が非漢字圏からの初学者である。また、同コースは媒介語として英語が使用されるため、学習者は英語ができることが前提となっている。表 1 にあるように、毎回の授業の半分（前半の 45 分間）を辞書検索に必要な漢字の構造や用法に関する解説と実際の検索作業に当て、後半の約 45 分間を 10 ～ 13 個程度

[表 1：北海道大学大学研修コースにおける初級漢字カリキュラム（2004 年 4 月期）]
（新規漢字総数は 231 字。読み替え漢字（斜字体）を含まず）

	授業日	辞書使用に関する活動（45 分）		新規学習漢字（45 分）
1	4 月 14 日	日本語表記の概論		(ひらがな 第 2 課)
2	4 月 19 日	漢字概論		(ひらがな 第 4 課)
3	4 月 21 日	L 1： 辞書検索のための 基本的知識	Introduction 漢字辞書中の情報	一二三四五六七八九十百千万円
4	4 月 26 日		Unit 1 書き順に関するルール	人子学生先男女友山田川
5	4 月 28 日		Unit 2 画数の数え方	上中下左右東西南北
6	5 月 10 日		Unit 3 ローマ字⇔ひらがなの変換方法	前後日本国
7	5 月 12 日	L 2： 総画／字型索引に 関する知識	Unit 1 SKIP（字型）索引の使い方	大小安太高長赤白青黒色北
8	5 月 17 日		Unit 2 SKIP1～ SKIP3	時間分毎年月週今去来昨明
9	5 月 19 日		Unit 3 SKIP4	何曜火水木金土平成午前後日月
10	5 月 24 日		Unit 4 いろいろな漢字フォント	見聞食書字手紙話英語
11	5 月 26 日	復習，生教材を使った読解練習		
	6 月 2 日	中間試験（辞書第 1 課ユニット 1～第 2 課ユニット 4，新出漢字第 3 回～第 10 回）		
12	6 月 7 日	L 3： 部首索引に 関する知識	Unit 1 部首索引の使い方	春夏秋冬雨海風森林空花
13	6 月 9 日		Unit 2 部首 「へん」と「つくり」	工文農電気理医歯部図書館
14	6 月 14 日		Unit 3 部首 「かんむり」と「あし」	教飲売買起寝切洗会泳行帰来
15	6 月 16 日		Unit 4 部首 「たれ」，「かまえ」，「によう」	朝昼夜入出習働作使終始
16	6 月 21 日	L 4：音訓索引に 関する知識	Unit 1 音訓索引（音訓ルール）	言止休歩運遊読持歌答音楽
17	6 月 23 日		Unit 2 音訓索引（音訓索引の使い方）	父母兄弟姉妹娘息祖私家族
18	6 月 28 日	L 5： 電子辞書の使い方	Unit 1 電子辞書の使い方(1)	勉強立泣覚勤着住知主会社
19	6 月 30 日		Unit 2 電子辞書の使い方(2)	自動車試験絵地図辞米石油
20	7 月 5 日	L 6： 漢字・熟語の構成	Unit 1 象形，指示，会意，形成文字と音符	調集返送伝思考受開閉消落
21	7 月 7 日		Unit 2 熟語の構成(1) 3 字熟語	説仮証実方法
22	7 月 12 日		Unit 3 熟語の構成(2) 4 字熟語	論結果察明考
23	7 月 14 日	L 7： 他技能への応用	Unit 1 新聞の見出しを読む	好短広低新古早遅寒暑暗明開
24	7 月 21 日		Unit 2 知らない漢字を聞く／説明する	目耳目口足首歯鼻指頭熟痛病薬
25	7 月 26 日	読解総合練習		
		若冷悪忙静簡単元同重多少		
26	7 月 28 日	復習，生教材を使った読解練習		
	8 月 2 日	期末試験（辞書第 3 課ユニット 1～第 7 課ユニット 2，新出漢字第 12 回～第 25 回）		

※ 表中、斜体字で示されている漢字は、既出ではあるが新規の読みを導入するものである。

の新規漢字の導入解説と定着練習に当てている。新規漢字の導入には、辞書検索活動の教材とは別に、表1中の各漢字の意味・読み・筆順・漢字語の使い方が記された漢字シートと練習シートを用いている。以下、同コースの漢字カリキュラムを示す。

4. 2 使用漢字辞書

同コースで使用している漢字辞書は、『講談社漢英学習字典』（ハルペン、1999）と電子辞書「シャープ PW-A3000」で、学習者全員に購入させ、授業、各課ごとの小テスト、中間、期末各試験で使用させている。本コースでは、まず『漢英学習字典』を用い、その使用法を通して画数の数え方、各索引、部首や音訓の使い方の指導、および部首や音訓ルールについての導入を行っている。今日、電子辞書が普及している中で、紙版の『漢英学習字典』を先に導入している理由は、日本語学習者向けに編纂されている『漢英学習字典』では、SKIP（字型索引）という特殊な索引システムが採用されており、漢字の画数が数えられればゼロ初級者でもすぐに検索が可能なのである。一方、電子辞書は、日本人向けに作られているため、情報が多すぎる、表示される漢字にふりがながついていない、検索過程が複雑であるなど、初級学習者には負担が大きい。そのため、基本的な索引の使用法を紙版の辞書で学習した後、コース後半で電子辞書の使用法を指導している。これら両者によって得た漢字に関わる知識は、他の辞書やインターネット上の辞書での検索機能を使用する際にも役立つものである。

4. 3 指導項目

辞書検索活動を中心としたカリキュラムにおいては、辞書検索に必要で、且つ学習者の言語活動に役立つと思われる表2の項目について指導している（スケジュール等は表1の

【表2：各課各ユニットでの指導項目と辞書検索技術との関わり】

	課(L)・ユニット(U)	指導項目	辞書検索技術との関わり
導入部	L1 Introduction	辞書中の情報	辞書記載情報の読み取り
	L1U2	書き順	
	L1U3	ローマ字⇄ひらがなの変換	
各種索引の使用法	L1U1 と L2U1-3	画数の数え方、字型	総画索引
	L2U4	各種フォント	総画・部首索引
	L3U1-4	部首	部首索引
	L4U1-2	音訓（の使い分け）ルール	音訓索引
	L5U1-2	電子辞書	複数の索引の同時使用
漢字知識の強化	L6U1	六書	検索の高速化
	L6U2-3	熟語の構成	
他の言語技能との関わり	L7U1	送りがなによる品詞判断	応用・総まとめ
	L7U2	未知の漢字の聞き方/説明のしかた	

左欄を参照)。これらの項目は辞書検索に関わる知識、技能であると同時に、漢字の基本的な構造と用法の把握につながっており、以後の体系的な漢字学習を促進するものと考えられる。以下、各項目について辞書検索技術との関わりを見ていく。

4. 3. 1 導入部 (L1)

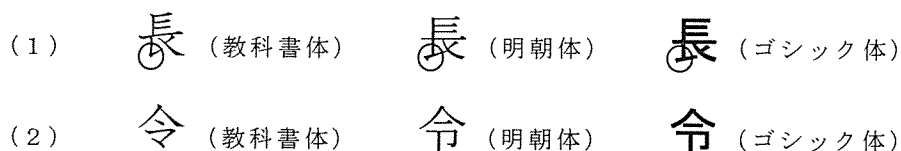
授業では、まず辞書検索活動において重要な位置を占める「辞書中の情報」すなわち辞書内の各漢字の読み方、画数、書き順、意味などの記述の見方を学習する。ここで漢字についてどんな情報があるのかを俯瞰的に把握することができる。また、漢字と直接は関係していない「ローマ字台ひらがな」の変換も、辞書の音訓索引や読み方の記述がローマ字表記である場合や、電子辞書の入力などに必要となるため、この段階で学習しておく。

4. 3. 2 各種索引の使用法 (L2-L5)

総画・字型索引および部首索引を使用するには、「画数の数え方」のルールを導入する必要がある。漢字の構成要素である画を正確に数えられるようになると、その時点で総画索引が使用可能になる。暗記型の漢字学習では、画数のカウントは、漢字を正確に捉え、書くことのみと関連していたが、ここではその技能が辞書検索という言語活動に直結している。そして、総画索引を使えば、辞書に掲載されているあらゆる漢字語彙を自力で調べることができるようになる。北海道大学での以前のカリキュラムでは30～40字程度の漢字しか知らない時期に、本稿の方法では、ゼロスタートの学習者であっても漢字辞書に掲載の3万余の漢字語彙を扱うことが可能になる。

また、教材として駅構内の表示やATM、公共料金の請求書などを使用しているため、扱われる漢字語にはいわゆる「初級レベル」ではないものが含まれている。しかし、生教材に現れているものは、日常生活に密着した漢字語彙であると言え、それらを初級の早い段階から独力で検索できる技能は、サバイバル能力の養成のためにも非常に重要なものであると考えられる。

L2の最後のユニット(L2U4)では、総画・字型索引と部首索引を適切に活用できるよう、生教材中の各種フォントの形の特徴や名称、使用される場面について学習する。特に、学習者が教室で学習する漢字のフォント(多くの場合、教科書体)と日常生活で目にすることの多いフォント(教科書体以外の様々な書体)の相違点に注目させる。例えば、図1(1)の「はね」の部分に見られるように、明朝体やゴシック体のフォントではあたかも2画で



【図1：フォント別の字形の見え方の違い】

構成されているかのように見えるものが、実際は教科書体フォントで見られるように1画であること、また、(2)のように違う字形に見えるものが、実は同一漢字であることなどを学習する。フォントについては、これまで厳密に指導されることはなかったかもしれないが、辞書検索の際に様々なフォントの漢字の画数を適切に数えたり、書体の違いに関わらずその漢字を正確に認識できるようにするために、不可欠な指導項目である。

L3では、部首索引を使用するために必要な知識として、部首の種類と画数、部首の表す意味、名称等を学習する。これら部首に関する知識は、未知の漢字の意味の推測や効率的な漢字記憶、電子辞書の部品読み索引の使用につながるだけでなく、口頭で漢字を他人に説明する場合など、言語活動を行う上で、他技能とも関わって使用されることになる。

L4の音訓索引に関しては、索引の使用技術を身につけるため、音訓の使い分けのルールを学ぶ。それに加えて、漫然とした辞書検索ではなく、より迅速な検索を目指し、(1)音訓索引で、例えば「長」の場合、音読み「ちょう」にリストされている漢字は33字で、訓読み「ながい」にリストされている漢字は2字であるように、同じ読みを持つ漢字の数は概して音読みよりも訓読みのほうが少ないため、訓読みを優先して検索することの意義を認識させる、(2)辞書の各漢字の記述が音訓で分類されていることから、どこから見れば探している情報を早く見つけられるかを意識させる、などの指導を行う。

L2からL4までの総画・字型索引、部首索引、音訓索引については、紙の辞書を用いて学習するが、L5では、電子辞書を使って検索する練習を行う。電子辞書では複数の索引を同時に使用でき、また複数利用すれば候補が絞られて迅速に検索できることから、これまでに学習したことを総合的に復習し活用できる機会となる。漢和、国語、和英などの複数辞書間を移動して検索する「ジャンプ機能」の使用法も合わせて学習する。

4. 3. 3 検索の効率化 (L6)

この課まで学習した時点で、学習者は辞書を自力で使いこなせるようになっているが、L6では更に効率的に検索できるようになることを目指す。まず、六書、特に形声文字の音符に着目し、漢字の音読みを推測する技術を身につけ、未習語でも音を推測して音訓索引が活用できるようにする。

また、3字以上の熟語も迅速に検索できるよう、熟語の語構成を学習する。例えば、「3字熟語の多く(82.6%)は「〇〇+〇」のように2字と1字に、4字熟語のほとんど(91.2%)は「〇〇+〇〇」のように2字ずつにそれぞれ分割されること(宮島、1982)や、「高」(高性能、高品質)、「券」(割引券、図書券)、「料」(入場料、授業料)などの接頭・接尾辞的な機能をもつ漢字について学び、字数の多い熟語でも、語構成を推測して検索する力を身につける。

これらの知識は、辞書検索時以外でも、漢字音の推測や意味の把握において役立つものである。

4. 3. 4 他の言語技能との関わり (L7)

最後の L7 では、ここまで (L1-L6) で学んだ漢字に関する知識の総合的・発展的な応用として、漢字の領域だけに限らない、他技能とも連携した応用練習を行う。具体的には、新聞の見出しを読む読解タスクや、ある漢字について口頭で説明する会話練習である。

読解タスクでは、(1) 漢字語彙の品詞や辞書形の特定期限に、それまでに学習した様々な文法知識を適切に活用できるか、(2) 特定した漢字語彙を辞書に見つけ、適切な対訳が得られるか、がポイントとなる。例えば、実際の授業内では図 2 の新聞記事²を扱い、「私がママよ 生まれるまでは」「日本人の子を出産 米国の代理母に会った」「お金だけじゃない。助けたい」などの大見出しの読解作業を行っている。

この見出しの中の「会った」「助けたい」といった漢字語は、そのままの形では辞書に掲載されていない。検索を達成するためには、漢字の送り仮名についての知識と既習の文法事項から、それらが動詞のタ形や、「～たい」の接続した動詞であることを判断し、辞書形に変換する必要がある。さらに、読解タスクを達成するためには、辞書に記載された「助ける」の意味を、文脈に戻して「～たい」の意味に変換しなければならない。また、「子を出産」の「出産」は助詞「を」に後続していることから動詞であり、既習の「勉強」や「洗濯」と同類の「～する」型であることを類推し、辞書の見出し語に「出産する」の形でしか掲載され



【図 2：教材例一見出しを読む (L7U1 から)】

ていなくても、その語に確実にたどり着ける必要がある。このように、辞書で読みや意味を確認するための前段階の作業や、辞書中の意味を文脈に対応させる検索終了後の作業など、いくつものステップが的確に行えるよう、既習の文法事項と漢字に関する知識を総合的に活用する訓練を行う。

こうした読解練習は、個別の漢字知識を処理、記憶、反復していくことを主眼とするボトムアップ型の学習とは異なり、学習者が、漢字語彙だけでなく文法や文脈に関する様々な知識を駆使して行う複合的な言語タスクであると言える。また、初級初期の段階からオーセンティックな文脈中の漢字語彙の使用例に触れる機会を得ることは、漢字を学習す

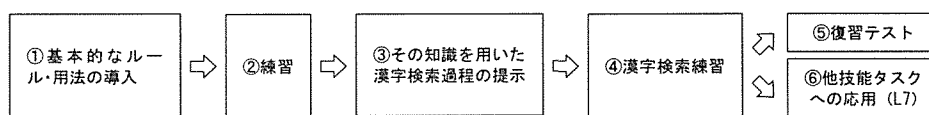
ることの意義を学習者に実感させることにもつながる。

会話タスクは、これまでに学習した漢字と漢字に関する知識とを活用して、電話などで漢字を説明したり、説明を理解するものである。例えば、「沖田さん」の「沖」を説明する時、母語話者は、「へん」の種類と「つくり」の形状から、『さんずい』に『中』などと相手に伝える。学習者もこのような処理と説明ができるようにする。漢字の説明には、部首だけでなく、字型認識、漢字の意味、音訓の言い換え、漢字熟語の知識などを総合的に利用する必要がある。また、これらをどのような文型で話したらいいかということも学習し、最終的には、電話での会話やパーティーなどの筆記用具のない場面で、口頭で自分の住所や相手の名前の漢字の情報交換ができるよう練習する。このように、本カリキュラムに基づいた授業では、漢字クラスの中で「会話の練習」が行われている。漢字の知識は、それ自体独立しているのではなく、他の技能や知識と結びつくことによって、様々な言語タスクを達成することが可能となる。

読解や会話などの教室活動を採用することで、漢字の領域だけに限定されない日本語の総合的な演習が行えるようになると同時に、「暗記もの」としての受け身の漢字学習でなく、学習者が習得した知識・ルールを自ら活用して能動的に授業に参加するタスク遂行型の授業を展開することができるようになる。

4. 4 授業の進め方

前節で全体の指導項目を説明したが、各項目内の授業の進め方は、基本的に図3の①～④のような流れになる（⑤は次節「4. 5: 評価」、⑥は「4. 3. 4: 他技能タスクへの応用」を参照）。



【図3：授業の進め方】

L3U3の部首の授業を例に述べる。部首「かんむり」「あし」の基本的知識の導入（図3①）においては、まず代表的なものをいくつか取りあげ、それらの画数、意味、名称を推測しながら学習し、辞書の部首リスト内から該当の部首を見つける練習を行う。その他の重要な部首も合わせて学習し、部首を判断する類推力を養う。その後、さまざまな漢字の部首にあたる部分を認識し、その名前や意味を問う練習問題で知識を確認する（図3②、図4を参照）。

次に、習得した基本的ルールを用いて辞書検索活動を行うステップへと進む（図3③）。ここでは該当項目のトピック（L3U3ではデパートのフロアガイド（図5））である生教材中の語彙を使用し、部首索引を用いた辞書検索過程を順を追って学ぶ。

最後に、ここまで学んだ漢字の知識と基本的ルール、辞書検索過程を踏まえて、練習

Circle the radical of each kanji, and complete the table.

Examples of kanji	kanmuri or ashi	Name of radical	Meaning
家 室 宅	kanmuri / ashi		
買 貨 貸	kanmuri / ashi		
雲 雪 雷	kanmuri / ashi		
花 草 若	kanmuri / ashi		
思 忘 悲	kanmuri / ashi		
先 元 児	kanmuri / ashi		

〔図 4 : 教材例—基本的なルール・用法の練習問題〕

[Exercise 4] The following is a floor guide of a department store.

Give the readings and meanings of the following words using the Radical Index.

フロアのご案内

7F	レストラン・美容室
6F	家庭用品・寝具・家具
5F	文具・書籍・CD
4F	時計・宝石・ベビー・子ども
3F	紳士服・スポーツ用品・メガネ
2F	婦人服・靴・バッグ
1F	化粧品・傘・婦人雑貨・アクセサリー
B1F	食品・お酒・薬局・コインロッカー

マークのご説明

化粧室
電話
喫煙所
忘れ物カウンター
休憩所
地下鉄連絡口

1 2 e.g. 3 4 5

Kanji	radical	stroke count of the radical	Radical number	words	Reading	Meaning
e.g.) 家	宀	3	40	家具	かぐ	furniture
1) 籍				書籍		
2) 寝				寝具		
3) 宝				宝石		
4) 忘				忘れ物		
5) 薬				薬局		

Did you understand all the information on the floor guide?

Question1: on which floor can you find the following items?

(a) pillows (b) chairs (c) medicine (d) jewels (e) books (f) lost articles
 ____F ____F ____F ____F ____F ____F

〔図 5 : 教材例—デパートのフロアガイドと、辞書検索の練習問題〕

問題（図5）を行う（図3④）。ここでも、生教材中の漢字語彙を使用する。概して、学習者は漢字語の読みと意味がわかった時点で満足しがちで、漢字語彙を辞書の中で探し当てても、それが提示されている文脈に戻らず、漢字語の意味記述の羅列を見るだけで終わってしまうことが多い。しかし、それだけでは文脈の中で適切に漢字語彙を理解しているかを確認することはできないため、検索課題の最後に、その漢字語彙を文脈の中に戻して理解する確認問題（図5、Question 1）を必ず付けている。

4. 5 評価（小テストと定期試験）

次に、学習の評価がどのように行われるのかについて述べる。各課の終わりには復習テストを用意し、学習項目の定着度合いを確認する（図3⑤）。これは漢字に関する知識と、辞書検索の能力を測る問題である。

例えば、L1の「導入部」が終了した時点での小テスト（図6）では、辞書を使用せず、未習漢字に遭遇しても画数が正確に数えられるか（[1]）、漢英辞書中のローマ字表記をひらがなに変換できるか（[2]）、を試す。[1]の設問では「究」と「跨」の最終画が一画で書かれることを理解しているか、[2]では特殊拍が含まれる語彙も正確にひらがなに変換できるかがポイントであり、いずれも辞書検索活動には不可欠の知識である。

また、各索引の課では、漢字の構造と用法に関する設問の他、辞書の当該索引を使って生教材中の漢字語彙を検索し、文脈に合う意味を選べるかを試すテストを行う。

期末試験は、5割が毎回の授業の半分で導入される新規漢字とその関連語彙の定着をみるアチーブメントタイプの問題（辞書不使用）、2割が漢字に関する知識を問う問題（辞書不使用）、3割が紙辞書や電子辞書を用いた課題達成の能力を測る問題となっている。辞書使用の問題は、例えば次頁の図7³のようなものである。各ユニットで学習してきたように、

[A]：生教材中の漢字語彙を検索し、読みと意味を回答する問題、[B]：[A]で得られた語彙の意味と、与えられたグラフに依拠しながらその文脈の内容を読み取る問題からなっている。これらのタスクを達成する過程には、索引の選択、画数の特定、品詞や辞書形や音訓読みの判断、文脈と照合しながらの最適な対訳の選択、ローマ字から平仮名への変換、といった学期を通じて扱われた学習項目が含まれている。時間的制約も設けているため、

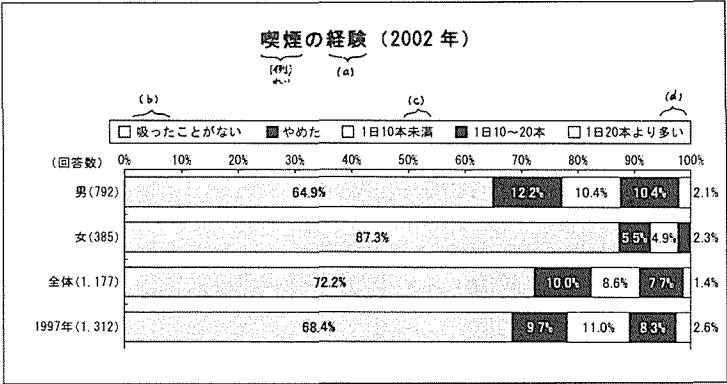
[1] ^{なんかく} 何画ですか？ How many strokes? (1X2=2)		
(れい)	川	(a) 究 (b) 跨
	(3)	() ()
	→ 3 strokes	
[2] ひらがなで書いてください。 (2X3=6)		
Write the following in hiragana.		
(れい)	namae	→ (な ま え)
(a)	shuchō	→ ()
(b)	gen'in	→ ()
(c)	sakka	→ ()

【図6：教材例－第1課の小テストの問題】

その他の学習項目を有効に活用して迅速に判断・検索できなければならない。

VII. 右は 2002 年に 行われた A 大生への喫煙についてのアンケート調査の結果です。
下の [A] と [B] の質問に答えなさい。時間は 20 分です。

The attached shows the results of a survey of smoking habit that A university students have.
The survey was conducted in 2002. Answer the questions in [A] and [B] below.
(You have 20 minutes to finish this section)



出典:『北海道大学学生生活実態調査報告書 2002 年版』

[A] (a) から (d) の、ひらがなといみを書きなさい。 (4.5X4=18)

Give readings (hiragana) and meanings (English) for (a) through (d).

	ひらがな	いみ
(例) 喫煙	(きつえん)	(smoking (cigarette))
(a) 経験	()	()
(b) 吸った	(った)	()
(c) 未満	()	()
(d) 多い	(い)	()

[B] (1) は、正しい数字を () に入れなさい。

(2) と (3) は正しいものを () から選びなさい。 (4X3=12)

For (1), write the appropriate number in ().

For (2) and (3), choose the appropriate one from each ().

- (1) 2002 年には、全体の () % が「喫煙したことがない」と答えた。
(2) 女子学生で今たばこを吸っているのは、(2.3 / 4.9 / 7.2 / 12.7) % だ。
(3) (1997 年 / 今) より (1997 年 / 今) のほうがたばこを吸っている学生が多い。

[図 7 : 教材例一期末試験の問題 (辞書使用)]

5. 本カリキュラムの成果と今後の課題

本稿で述べた漢字カリキュラムを用いて授業を行った 2004 年 4 月期, 10 月期, 2005 年 4 月期の学生計 53 名から, コース終了時に漢字クラスに対する評価とコメントを得た。評価は授業内で使用した教材・授業内容について, 2 (very useful) から -2 (not useful at all) の 5 段階で行った (表 3 参照)。

[表 3 : 漢字クラスに対する評価 (平均値)]

教材		辞書		授業内容								
辞書使用活動教材	新規漢字導入教材	紙辞書 漢英辞典	電子辞書	書き順	ローマ字 ひらが なの変換	型 画数の 数え方・字	各種 フォント	部首	音訓 (の使い分け)	熟語 の語構成	送り仮名 による品 詞判断	生教材 の読解活動
1.77	1.67	1.85	1.75	1.54	1.66	1.76	1.26	1.63	1.59	1.44	1.51	1.38

まず, 教材に対する評価に関しては, 表 3 に見られるように, 辞書使用活動のための教材は, 新規漢字導入のための教材と共に非常に高く評価された。つまり, 辞書使用活動が, 新規漢字導入と同等, またはそれ以上に有用だと評価されていることがわかる。

また, 授業内で使用している漢英辞書 (紙辞書)・電子辞書の有用性についても, 紙辞書・電子辞書共に高い評価を得ており, 初級段階においても使用方法が理解できれば, 辞書は非常に有用なものとみなしているようである。漢英辞書 (紙辞書) と電子辞書ではどちらが使いやすいかを聞いたところ 38% の学生が紙辞書, 32% の学生が電子辞書, 21% の学生が両辞書と答えている。さらに, 細かくコメントを見てみると, 紙辞書は「検索しやすい」「直接 (電子辞書のように他の機能へジャンプすることなく), 調べたい漢字語に行きつくことができる」等の肯定的なコメントのみだった。一方, 電子辞書は「持ち運びがしやすい」「速く検索できる」という点が評価されているものの, 「英語での説明がないので検索が難しい」「漢字 (見出し字) の熟語リストに検索したい漢字語が掲載されていない場合が多い」などの意見も多くみられた。前述したように, 現在市販されている電子辞書は日本語母語話者向けであるが故に, 掲載情報が多すぎて, 初級学習者にはその中から必要な情報のみを取り出すことが非常に難しい。また, 英和機能で日本語を探す際にも, 漢字にふりがながないため, さらに国語辞典や和英辞典を使って (ジャンプして) その漢字の読み方を調べる必要があるなど, 検索過程が複雑である。加えて, 漢字辞書に掲載されている和語が非常に少ないという問題もある。学習者のコメントはこうした問題点を反映しているものと思われる。今後, 日本語学習者にとって, 使いやすい電子辞書の開発が望まれる。

辞書使用活動の各項目に対する評価は, 全ての項目が平均 1 (useful) 以上であり有用であるとみなされているが, 「各種フォント」「熟語の語構成」「漢字辞書を用いた生教材の読解活動」は他の項目と比べると低かった。「生教材の読解活動」については, 「練習時間が

少なすぎた」「もっと時間をかけて取り組みたかった」等のコメントが多くみられ、それが評価の数字にもつながったと思われる。漢字辞書に限らず辞書を使用した読解活動は、読解クラスなどとも連携して練習を増やしていく必要があると言える。

「各種フォント」「熟語の語構成」についての学習者のコメントはなかったが、高い評価を得た「画数の数え方・字型」「ローマ字⇄ひらがなの変換」「部首」「音訓ルール」などと比べると、これらの項目は辞書で検索する過程に直結したものではない。様々なフォントの漢字語を認識したり、4字以上の熟語を語構成を考えて適切に分割したりする作業は、辞書を開く前段階の作業ともいえる。当該課以外では、各課の学習項目の習得に集中させるため、こうした前段階の作業をあまり必要としない生教材を用いていた。そのため、フォントの違いについての知識、3字・4字熟語の語構成についての知識を、漢字語の検索過程の中でどのように生かしていくのかを身につけにくかったと考えられる。今後は、実際の生活場面と同様、様々なフォントの漢字語、4字以上の熟語を提示し、それを検索する練習を増やす必要がある。

教師の観察からは、以下の2点の変化が見られた。まず、以前は与えられた漢字を覚えていくという受動的なものになりがちだった漢字の授業が、辞書検索活動を取り入れることにより実践的な言語タスクが中心の参加型のものに転換され、学習者の受講態度も積極的なものになった。また、漢字以外の文法、読解、作文等の授業、更には自宅学習や日常生活においても、学習者が自発的に辞書検索を行う様子が観察・報告されるようになった。こうした「自立的学習」へのこのカリキュラムの成果は、今後実証的に検証していきたい。

以上のような一定の成果が見られる一方で、今後このカリキュラムを発展させ、広く普及させていく上では、前述のように漢字の評価法についての課題も残されている。認識、再生可能な漢字語彙数を問題にするアチーブメントタイプの試験が主流となっている現状では、このカリキュラムにもとづく漢字クラスの修了生が、別のコースのプレースメントテスト等を受けた場合、本来初級で扱われるとされる漢字が未習であるという否定的な評価を受ける可能性もある。新しいカリキュラムの成功の可否は、カリキュラム自体の理念や整合性と共に、その趣旨や狙いに連動した評価のシステムが広く受け入れられ確立されていることが必要不可欠であると言えるだろう。

注

- 1 学生に漢英字典を購入させ、毎回の授業で漢字に関連したトピックについて講義する授業形態は、北海道大学留学生センター研修コースにおいて、1990年代半ばから同センター助教授ら（当時）によって企画・実施されていた。筆者らが担当するようになってから主に関与してきたのは辞書検索作業を毎回の授業で行うようにしたことと、小テスト・定期試験への導入の部分である。
- 2 本新聞記事に関しては、朝日新聞社より教材への利用及び本稿への転載の許可を得て

いる。

- 3 本アンケート調査に関しては、北海道大学学生課より教材への利用及び本稿への転載の許可を得ている。

参考文献

- カイザー・シュテファン (1998) 「「非漢字圏＝悲観事圏」からの脱却－漢字教育から語彙教育へ－」『平成 10 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 25-31.
- 加納千恵子 (1994) 「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9, 41-50.
- 加納千恵子 (1997) 「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念－』, 凡人社, 257-268.
- 加納千恵子 (1999) 「漢字教育の動向－情報処理科学や認知科学の視点から」『月刊言語』, 1999 年 4 月号, 70-76.
- 川口義一 (1995) 「コミュニケーションアプローチと認知科学に基づく漢字指導の試み」川口義一・加納千恵子・酒井順子編著『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』, 創拓社, 250-262.
- ハルペン・ジャック編 (1999) 『漢英学習字典』, 講談社インターナショナル.
- 平塚真理・副田恵理子 (2005) 「漢字学習における漢字辞書使用の効果－非漢字圏初級学習者を対象に－」『日本語教育』125, 86-95.
- 牧野成一他 (2001) 『ACTFL - OPI 入門－日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』, アルク.
- 宮島達夫他編 (1982) 『図説日本語－グラフで見ることばの姿』, 角川書店.
- 山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』, アルク.
- 山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法』, ひつじ書房.